

コロナ禍における学生バンド -ライブハウスと共同体の変遷-

白藤 優一

キーワード：パンデミック、ライブハウス、学生、共同体、コミュニティ

要旨

本稿は、自身が約4年間所属している軽音楽系サークルであり学生バンドの集合体的存在である『北大フォークソング研究会』（通称：『F研』）を1つの「共同体」として認識した上で、『F研』を共同体たらしめているもの・コロナ禍の活動を経た『F研』という共同体の変遷・『F研』という共同体における「コロナ禍」「ライブハウス」の存在意義について考察することを目的とする。

第1章では、序論として本研究を行うに至った背景を踏まえつつ研究の動機を述べた後、研究の目的と構成を述べた。

第2章では、『F研』についての基本的なデータとコロナ禍での活動経歴を提示しつつ各年度の状況を概説した後、『F研』における筆者の立場を概説した。また、北海道内のライブハウスがコロナ禍で受けた影響について、具体的な取り組みを提示しつつまとめた。

第3章では、ライブハウスの文化的位置づけを考察した宮入の論や、ライブハウス内の共同体についてフィールドワークを行った生井の研究について、自身の見解を述べた。加えて、「相互扶助」「災害ユートピア」「歌による参与」について触れつつ、本研究の立場を述べた。

第4章では、本研究における調査の概要・方式・場所を述べた。また、調査を行うにあたっての留意事項を説明した。

第5章及び第6章では、参与観察やオートエスノグラフィーに関する調査結果を述べた。第5章において、『F研』のライブイベントやコミュニティ内の対話による「共同体的意識」の醸成が、『F研』の共同体的なつながりを構築・維持していることについて述べた。続く第6章において、『F研』がコロナ禍によって「盛り上がり」の場を喪失した後に、周辺のコミュニティとのつながりを強化する様子について述べた。

第7章では、インタビューやアンケートに関する調査結果を述べた。『F研』の「オリジナルバンド」として学生バンド活動を行う人々がコロナ禍で体現した「自主性」や「開放性」が、コロナ禍収束後の『F研』をより活発化させたことについて述べ

た。

第8章では、第5章から第7章で述べた結果をまとめ、研究設問に沿って本研究の結論を述べた。また、学生バンドによる幅広いコミュニティを構成する一員となる『F研』という共同体の将来像を構想した。